

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 前田 和泉 印

学位申請者 ナザランカ カチャリーナ

論文名 〈新しい女〉をめぐる日露の比較文学論的考察

【博士論文の概要】

提出された論文の構成は以下のとおりである。

序章

第1章 ロシアにおける男尊女卑社会の危機

1. 「女性問題」
 - 1.1 「女性問題の提起及びその発展
 - 1.2 文学におけるニヒリストカのイメージ
2. トルストイと『アンナ・カレーニナ』
 - 2.1 「ミソジニスト」トルストイ
 - 2.2 家族の危機、トルストイ一族及びトルストイの作品を中心に
 - 2.3 『アンナ・カレーニナ』

第2章 日本の過渡期

1. 明治末期～大正時代の新しさ
 - 1.1 ジェンダー思想の変化、キリスト教の影響
 - 1.2 変化する女性像
 - 1.3 トルストイの受容、白樺派を中心に
2. 有島武郎と『或る女』
 - 2.1 フェミニスト有島武郎、彼の恋愛観
 - 2.2 『アンナ・カレーニナ』から『或る女』へ

第3章 〈新しい女〉の登場

1. ロシアにおいて
 - 1.1 十月革命と女性解放、アレクサンドラ・コロンタイの〈新しい女〉論

1.2 コロンタイの小説における〈新しい女〉像及び恋愛論

2. 日本において

2.1 日本における〈新しい女〉、平塚らいてう及び『青鞥』

2.2 『青鞥』の作品が描く女性の葛藤

終章

本論は日本文学とロシア文学における〈新しい女〉、すなわち、19世紀後半から20世紀初頭にかけて文学作品中に登場し始めた新しいタイプのヒロインについて、その系譜をたどりつつ、〈新しい女〉の何が新しかったのか、作家たちはどのようにそうしたヒロインたちを描いたのか、そして日本とロシアではどのような共通点と相違点、また相関関係があったのかを、とりわけレフ・トルストイ（1828-1910）と有島武郎（1878-1923）に着目して考察している。トルストイの日本文学への影響、とりわけ白樺派との影響関係に関してはこれまでも数多く論じられてきたが、「女性解放」という側面に焦点を絞って分析した点は本論独自のものであり、それによって日露における「女性問題」やその歴史的・社会的・思想的背景を立体的に浮かび上がらせている。

第1章1節では19世紀ロシアにおいて「女性問題」をめぐってどのような議論が繰り広げられ、〈新しい女〉の萌芽と言うべき女性の形象が文学作品中でいかに描かれてきたかを検証している。「ニヒリストカ」と呼ばれる、旧来の女性の理想像から外れた「急進的」な女性たちは、一般的に揶揄と嘲笑の対象とされてきた。トルストイを含めて多くの作家たちの作品において、ニヒリストカたちは短髪でだらしなく、性的に「ふしだら」な側面が強調されて描かれた。2節においては、「女性問題」についてトルストイがどのような立場をとっていたのかが検証される。従来トルストイは「女嫌いのアンチ・フェミニスト」と目されてきたが、ナザランカ氏はトルストイの伝記的資料や作品を分析し、複雑で一筋縄ではいかないこの作家の女性観を丁寧に読み解いている。一見すると封建的、あるいは女性恐怖的に見えるその姿勢は、単なる保守主義やミソジニーではなく、「エロス」への恐怖に由来するものであり、必ずしもトルストイは「アンチ・フェミニスト」と決めつけることはできないとナザランカ氏は主張する。その上で『アンナ・カレーニナ』をジェンダー的観点から考察し、主人公アンナは当時のロシア社会におけるジェンダー的抑圧の犠牲者であり、19世紀末より本格的に登場してくる〈新しい女〉像の先駆けとも呼べる存在だったと結論づける。

第2章1節では、明治末期から大正時代にかけての日本文学における女性像の変化が論じられる。この時代の日本は、キリスト教を含む西欧思想の影響などにより社会における女性の扱いが変動していくプロセスの中にあり、それに伴って文学で描かれる女性像も変

化を遂げた。本論では田山花袋『蒲団』、夏目漱石『三四郎』、森鷗外『雁』、永井荷風『腕比べ』、武者小路実篤『友情』を取り上げ、当時の男性作家たちが〈新しい女〉の先駆者となった新しいタイプのヒロインをいかに描いてきたかを検証し、また白樺派によるトルストイ受容を考察している。白樺派のうち、最も熱心なトルストイの「弟子」と目されているのは武者小路だが、宗教観やそれに関わる精神的葛藤という点では、トルストイに最も近かったのは有島であった。2節では、トルストイの『アンナ・カレーニナ』にヒントを得て生まれた有島の『或る女』に着目し、「アンチ・フェミニスト」と言われるトルストイの女性主人公アンナが、「フェミニスト」有島の描く〈新しい女〉とされるヒロイン葉子に対し、どのように影響したのかを分析し、二人のヒロインの類似点と相違点を浮き彫りにしている。両者とも「エロス」に身を委ねたが故に社会から疎外される点においては共通するが、アンナが自らの状況を隠さず正直に認めているのに対し、葉子はあくまで倉知との不倫関係を周囲に隠そうとする。葉子が「建前」に捉われ続けたのは、それだけ日本社会の「建前」による抑圧が主に女性に向けられていたことを示している。

第3章では20世紀に入ってから現れた日露両国の女性作家たちの描く〈新しい女〉が分析されている。第1節では世界の女性解放運動に多大な影響を及ぼしたアレクサンドラ・コロンタイ(1872-1952)による〈新しい女〉像が検討される。自由恋愛を標榜したコロンタイは、「性欲を満たすのは一杯の水を飲むのと同じぐらい単純なことである」とする、いわゆる「水一杯理論」が当時世界的に大きなセンセーションを巻き起こしたことで知られるが、実際にはコロンタイ自身は「水一杯理論」に賛同していたわけではないとして、ナザランカ氏は現在でも広く流通しているコロンタイへの誤解に反論する。むしろ彼女は『赤い恋』などの作品において、「水一杯理論」の二重基準や、女性に対するその破壊的な本質を暴露しているのであり、コロンタイにとっての〈新しい女〉とは、感情の自由や自我の尊重、金銭的自立などをその特質としていた。

コロンタイらの女性解放運動の高まりを受けて、日本においても1910年代にフェミニズム運動が本格的に始まる。その中心となったのが平塚らいてうであり、彼女が主導した雑誌『青鞥』である。第3章2節では、らいてうと『青鞥』に関係する女性作家たちが、いかに〈新しい女〉表象を模索したかが論じられる。19世紀ロシアのニヒリストカと同様、スキャンダラスなお騒がせ集団として批判され、社会から揶揄されることの多かった彼女たちは、同時代の女性たちの悩みや葛藤を、男性作家の視点による「謎の女」ではなく、女性自身の声によって提示している。それにより、旧来の道德規範から抜け出せなかった女たちの悲劇や、「ロマンチック・ラブ」イデオロギーと自由意志による恋愛とのせめぎ合いなど、社会におけるジェンダー規範の抑圧や、それと闘う女性たちの葛藤が、より鮮明に可視化されることとなったとナザランカ氏は結論付ける。

以上のように、本論においてナザランカ氏は日露両国の社会的・歴史的背景をそれぞれ

に踏まえつつ、両者を比較することで、〈新しい女〉をめぐる双方の文学史に新たな視座を切り拓いている。中心に据えられたのはトルストイと有島であり、この両者の描くアンナと葉子が〈新しい女〉の系譜の中でどのように位置づけられるのかを分析した第2章が本論の核をなしている。「アンチ・フェミニスト」とされてきたトルストイが「フェミニスト」有島をインスパイアするというパラドクシカルな影響関係は、日露におけるキリスト教思想とフェミニズムの関係性の「ねじれ」（ロシアにおいてはキリスト教思想が封建的女性観を支える土台となったのに対し、日本では逆に女性解放を促す役割を果たした）や、トルストイと有島の「エロス」観の齟齬などが背景にある。本論は、このような文学や思想の影響関係の多面性や複雑な陰影を丁寧な作品読解によって浮き彫りにした論考であり、すぐれた比較文学研究であると言えよう。

【審査の概要】

本論文の最終試験は2021年9月22日13時30分よりZoomによるオンライン形式で実施された。審査委員会は、前田和泉（主査）、沼野恭子（主任指導教員）、荒原邦博、柴田勝二（外部委員：本学名誉教授）、北井聡子（外部委員：大阪大学言語文化研究科）の5名である。審査ではナザランカ氏が本論文の概要を口頭で説明した後、各審査委員との間で質疑応答が交わされた。所要時間は約2時間15分であった。

論文全体の講評としては、多くの作品に幅広く目配りしつつ、論点を絞って日露の影響関係を論じた手堅い研究であると評価された。論旨も明快で、文章表現もわかりやすい。論文の構成が、ロシアと日本それぞれの女性解放事情（序章、1章）に始まり、『アンナ・カレーナ』『或る女』という露日それぞれの男性作家の描くヒロインの葛藤が分析され（1章、2章）、その後のロシア・日本の女性解放事情と女性自身による創作を考察するという流れになっており、軸の定まったものとなっている点も評価される。日露それぞれの現実社会と文学の関係性が丁寧に論じられ、さらに日露文学の影響関係が組み合わせあって、非常に読み応えのある論文となっている。

その一方で、本論の有する課題や疑問点についても審査委員から指摘がなされた。主なものは以下のとおりである。

- ・「新しい女」という用語の定義が明確ではない。日本近代文学に描かれた女性像の「新しさ」と、いわゆる「新しい女」という概念は同一のものではなく、その点も含めてより精緻に論じ、定義づけるべきであった。
- ・脚注のつけ方が甘い。単に依拠した文献情報を示すためのみになっており、脚注の役割を十二分に生かし切れていない。
- ・ヒステリー研究の歴史的変化に目配りする必要がある。ヒステリーの原因に関して、シ

シャルコー（1825-93）は先天性の器官性疾患説を唱えていたが、1890年代にフロイトが心因性疾患説を提唱する。アンナと葉子におけるヒステリーの現れ方の違いは、シャルコーからフロイトへのヒステリー研究の転換を考慮して論じるべきである。

- ・日本文学における「新しい女」を論じるのであれば、同時代の漱石『明暗』や後続の谷崎潤一郎『痴人の愛』も取り上げていれば、「新しい女」の系譜をさらに深く考察できたであろう。

- ・大正生命主義についても触れるべきだった。有島は生命主義的であったからこそキリスト教から離れることになったのであり、葉子の人物形象も生命主義に裏打ちされている。

- ・イプセンなど、トルストイ以外の影響も大きい。また、アンナ以外の葉子の「プロトタイプ」や、彼女のモデルとなった人物についても、さらに踏み込んで論じる余地がある。

- ・日本文学の引用にあたって、新仮名遣いと旧仮名遣いが混在している。新字旧仮名で統一すべきである。

- ・ジェンダーやセクシュアリティを論じるにあたっての理論的枠組みが欠けている。

- ・コロンタイは家族制度の破壊を明確に志向していたが、本論ではその点の理解が不足している。

- ・『青鞥』以外にも、より直接的にコロンタイの影響を受けた日本の女性作家がいるが、彼女たちへの言及がない。

- ・『或る女』の執筆経緯をもっと精密に分析すべきだった。前半部分の元となった作品『或る女のグリンプス』から大きく改稿されており、その点に有島のジェンダー問題への理解の深まりが見て取れるというが、具体的にどの点がどのように改稿されているかについて説明がほしい。

- ・いくつかの事項に関して説明がなく、不親切である。たとえばV・プーキレフの絵画「不釣り合いな結婚」（65頁）は、ロシア文化を専門としない読者に対して最低限の説明が必要である。

これらの指摘に対して、ナザランカ氏は誠実に応答した。「新しい女」の定義が曖昧であることや注釈の甘さについては、率直に課題点として認め、一方、『青鞥』以外の女性作家に言及しなかった理由としては、そうした作家たちは主として政治的イデオロギーの側面からコロンタイの影響を受けており、本論の主眼とは合致しないため意図的に取り上げなかった旨が説明された。理論的枠組みについては、ジェンダー論それ自体を検討するのではなく、社会的・歴史的背景と文学作品との関係性やテキスト分析に重点を置いたため、十分に論中に組み入れることができなかつたと説明された。全体として、ナザランカ氏は自身の課題や現時点での不足点についてしっかり認識しており、今後の研究の展開についても明確な展望と意欲を持っていることが、最終審査における質疑応答から確認する

ことができた。

以上、本審査委員会は、ナザランカ氏の提出論文および最終審査の評価結果から、同氏が本学大学院博士後期課程の博士号学位の取得に十分な水準を満たしていると判断し、全員一致で同氏に博士（学術）の学位を授与することが適切であるとの結論に至った。